第二中学校だより

令和５年１１月号

↓二中新ホームページ↓

「明るい挨拶　光る汗　きれいな学校　きれいな心」

社会通念の変化、学校の変化

校長　小関　直

学校だより９月号では、「社会通念の変化」と「こども基本法の原則」を述べ、学校教育の在り方を見直さなければならない時期にあることをお伝えしました。その中でも、特に配慮すべきことは、子供の「意見表明権」の尊重です。子供たちの意見を聴き、改善を図ることは、主体性を育むうえでも極めて大切な視点です。しかし、日本の社会では、あまり意識されてこなかった視点でもあります。大人が子供の教育に責任を持つ。親は基本的生活習慣が身に付くようにしつけ、学校は集団生活を通して社会規範を指導する。そこに、子供の意見を取り入れるという発想はありませんでした。しかし、社会通念は時代とともに変化しています。価値の押し付けだけでは、様々な歪みも生じます。かつては許容されていたことも、今では、虐待、体罰として問題化することもあります。

本校ではこのような変化に対応するため、生徒会と教員、地域の方が討論する場「みんなの学校創造ラボ」（以下、ラボ）を設置（９月）し、生徒会の代表が意見表明を行えるようにしました。第１回のラボでは、生徒会から制服選択制の導入について意見表明がなされ、社会通念上の合理性について討論が行われました。制服については、様々な考えがあり、すぐに結論が出るわけではありませんが、これまで大人から子供にワンウェイで与えられていた制服が、子供の意見表明によりツーウェイになった意義は大きいと思います。参会者の方々も、生徒が保護者アンケートを実施し、客観的な数値を示しながら説明する姿に、生徒が持つ力や主体的に行動する力に大きな可能性を感じていらっしゃったようです。ラボでは、今後、制服のほか、校則についても取り上げることになっており、社会通念上の合理性に照らし合わせて討論することになっています。

このような動きは、本校に限ったことではありません。第四中学校では、生徒の意見を取り入れながら１年かけて校則の見直しを行い、臨時の生徒総会で生徒の意見集約を行いました。第六中学校では、ルールメーキングプロジェクトを設置し、生徒会を中心に学校生活の課題について、年間を通して話し合いを行っています。

なお、本校の取組は、メディアでも取り上げられ、教育専門誌等で次のように掲載されました。

こどもと創る 新しい校則（ルール）！ 新連載〈4〉

埼玉・新座市立第二中学校㊦

PTAや地域の人と協議する委員会設置

前回、子どもからの提案を受け、新たな服装としての「ポロシャツ」を導入した旨を記載した。これは校則の取り組みを担当した私が個人的に進めたわけではなく、根拠がある。

一つは、今年4月に施行された「こども基本法」である。「こども基本法」には、「意見を表明する機会」が確保され、「意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮されること」とある。

もう一つは、令和4年に改訂された「生徒指導提要」。校則の見直しを検討する際、生徒の意見を聴取したり議論したりする機会を設けるという内容が記載されている。

本校では、この「こども基本法」などにのっとりポロシャツを導入したこと以外にも取り組んだことがある。その一つは「みんなの学校創造ラボ」の創設だ。

これは、生徒会、教職員、PTA、学校運営協議会委員で構成される委員会である。校則・学校の決まりなどに関して、それぞれの立場から意見を述べ、意見の合理性や妥当性の整理を行うことを目的としている。

9月に行われた「みんなの学校創造ラボ」では、生徒会長が公約として掲げた「制服と体育着・ジャージーの選択制」について協議した。生徒会は協議に向けて、全校生徒と保護者にオンライン上でアンケートを取り、提案資料を作成した。

PTAや学校運営協議会委員からは「生徒が主体的に自分たちの学校を改善しようとする取り組みは、素晴らしい」とお褒めの言葉を頂いた。

私は「子どもの意見表明を尊重する環境を整えることは、風紀が乱れたり規範意識が薄れたりすることにつながるかもしれない」と考えていた時期があった。しかし、実際は逆であった。

自分たちで考え、決めたことを、責任を持って達成しようと子どもたちが主体的に動く。このように前向きに自治を行う姿は、教師が一方的に用意したルールを守らせようとするときには見られなかったことだ。

私は、今回の取り組みを経て、たとえ未熟であっても子どもが考えた方法や答えを受け止める姿勢を学んだ。

学校という小さな社会を改善していく当事者は教師だけではない。生徒・保護者・地域の人々を含めた全員で協議の在り方であると考える。

↑ **日本教育新聞**（１０月連載、松村大助教諭執筆）

クリック

子どもの意見

小学6年生の1学期。米国からの帰国子女の男児がクラスに転入した。間もなくの放課後、教室内で担任教諭に男児が大声で「ナンセンス」と何回も叫んでいた。恐らく学校の慣習を巡り、男児が反論していたのだろう。数人の生徒が入ってきたため、教諭は薄ら笑いで収めていた。

教師の言うことは絶対で、学校の決めたことに逆らう生徒は不良とされた昭和40年代。先生にストレートに意見を言う男児に驚きと衝撃を受けた。当時の私は既存の価値観に疑問も感じず、受け入れるだけだった。今となっては、子どもでも自分の意見を持つことの大切さが痛いほど分かる。

今年7月、新座市立第二中学校で、生徒会の提案から熱中症対策としてポロシャツ登校が始まった。制服と体育着に加え、三つ目の選択肢として導入した。生徒会にエールを送りたい。個々の意見や多様性を尊重する社会を構築するために、少年期の教育現場の大切さを改めて思う。

（毛利伸一）

↑ **埼玉新聞**（１０月掲載）